

## 石井雄介（日本大学 心臓血管外科）

### オーストリア病院研修を終えて

晩夏のウィーン国際空港に降り立った。音楽の都ウィーンは観光客でにぎわっていたが、私の心は晴れなかった。観光客の喧騒がうとましいとも思えた。

日本血管外科学会主催の distal bypass workshop に参加し、それが縁で Work shop の主催者 弘前大学心臓血管 福田幾夫先生のご配慮でオーストリア ウィーン Wilhelminen 病院 血管外科 Dr.Senekowitsch の元で研修を行う事になった。事前に Dr. Senekowitsch と詳細を打ち合わせたところ、御好意でホテルの予約をとっていただき、初日朝はホテルまで迎えに来て下さることとなり一安心で出発できることとなった。また、広島大学心臓血管外科 末田泰二郎会長のもと第 9 回日独血管外科学会がそれに先立って盛夏の広島で開催され、幸いなことに、Dr. Senekowitsch も参加され、事前にお会いする機会に恵まれた。彼は巨体ながらメールのやりとりから推察された通り温厚な方で、頸動脈 CEA から EVAR まで行うオールラウンドな血管外科医で、今回の学会では fene EVAR に際して、立体構築した腹部大動脈模型を用いたサイジング法を報告されていた。懇親会ではビールを飲みかわし、ウィーンでの再会を約束する事ができた。

明日からの研修への不安と期待が交錯するなか、ホテルへ向かった。時差もあり、眠れぬ夜を過ごしたが、朝 Dr. Senekowitsch との再会が生来の血管外科医魂を揺り動かしたのか、不安は吹き飛んでいた。

病院は広い敷地に低層階のたくさんの施設が立ち並び、血管外科はその一角にあった。早速、朝のカンファレンスに参加し、手術室へ案内された。10 室ある手術室のうち血管外科専用とされた手術室は 2 部屋。各々の手術室には最新式の C アームが設置されていた。患者はすでに手術台上で、麻酔科医が手術の開始を今や遅しと待ちわびていた。日本で当たり前の『ope 出し』の概念はなく、無駄がなく手術のみに集中できる環境がそこにはあった。

初回の手術は、CEA。執刀医は、クリニカルフェローと思われる中堅医師。自分より少し年齢は上であるが、彼の表情は自信に満ち溢れていた。自分の施設では CEA は、全身麻酔での手術であるが、当施設はほぼ全例局所麻酔での手術であるようだ。消毒が済み覆布をかけ今まさに手術開始となるが、術野には執刀医と自分だけ。上級医は未だ来ない。しかし、手術開始。いきなりの第一助手である。不安を感じる隙もなく、訳も分からないまま手術は始まった。しかし、手は自然と動くものである。国籍は違えど、同じ血管外科を志す者の視線の先は同じである。年間 300 症例を超える症例をこなす施設

のクリニカルフェローのメツェン裁きは、大胆ではあるものの迷いが無い。我が上司のような繊細さには欠けるものの正確である。症例数により培われた技術であろう。もとの見事に血管確保は終了し、遮断がかかる。ここで初めて、上級医がガウンを着て登場である。実に無駄がない。Eversion法での手術であり、慣れた手つきで手術は進行していく。技術を盗む間もなく、目の前の手際の良さに、傍観者となっている自分に気がついた。吻合が終了すると、造影しスムーズな流れを確認すると、上級医は手を下ろし、自分も我に返り助手の続きをするだけであった。術中、患者と執刀医の会話の中、手術終了となった。1件目の手術が終了すると、30分もしない間に、2件目の患者の準備が進められていく。1件目の症例のスムーズさに圧倒され、2件目の手術の記憶が曖昧になるほどである。2件目も瞬く間に終了し、その日の手術は終了。月曜日であったが、13時には、皆着替えを済ませ帰宅する。日本では考えられない光景である。

午後はフリータイム、ウィーン中心部までは病院から30分弱。電車で揺られ、街に繰り出す。まるで中世の世界に迷い込んだような景観が立ち並ぶ。しかしながら、オシャレなお店も立ち並び現代の暮らしと歴史的景観の間をみることができ、歩いているだけで気持ちが高まり、明日からの研修への活力となった。

翌日も朝からカンファレンスに参加、相変わらずドイツ語についてはいけないが画像から症例を理解しようと努めた。症例はfene EVAR。施設で作成した立体構築した腹部大動脈模型を用いたサイジング法で作成されたセミオーダーのステントグラフトでの手術であった。執刀医は、Wilhelminen病院外科のBossのDr. Afshinであった。圧巻のカテーテル裁きであった。無駄がないの一言である。デバイスも日本では使用できないものが数種類あり、日本と海外のデバイスラグを改めて痛感した。話は変わるが、昨年アメリカロサンゼルスで行われた、33th UCLA symposiumに血管外科症例検討会のご助力により参加させていただく機会を頂いた。そこで行われたMAQUET社主催のドライラボにも参加した。その講師陣にDr. AfshinとDr. Senekowitschがいたことは、数日後ウィーンのワイナリーでの会話で発覚した。すでに、以前に指導を受けていた二人の元での研修とは、思わぬ偶然であった。計5日間の病院研修において様々な手術に参加させていただくことができ、その他の面においても日本との違いを感じることもできた。短い期間ではあったものの、日本に持ち帰り反映できることは、微力ながら努力していきたいと感じた。そして何よりも、目には見えないものではあるが、血管外科医としてもモチベーションを大いに上昇させることができた。研修最終日前日にはDr. Senekowitschが深夜のウィーン市内を車で案内してくださった後、ルーフトップバーで酒を酌み交わすことができた。『次に来る時は、両親に帰ってこないと言ってから来なさい。』と一言。ジョークでもうれしい言葉である。次の機会があるならば、モチベ

ーションだけでなく技術も上げられる研修として、もう少し長く滞在したいものである。

この度は、このような素晴らしい研修の機会を与えてくださった日本血管外科学会、およびDr. Senekowitsch との橋渡しになってくださり、多大なるご迷惑をおかけした弘前大学心臓血管 福田幾夫先生、快くおくりだしてくれた血管外科の上司、同僚に改めて心より御礼申し上げます。

